



ジョルジュ・サンド『モープラ』に見る〈自律的個人〉の理想：女主人公エドメの人物像から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井下, 継実 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004805

投稿論文

ジョルジュ・サンド『モープラ』に見る〈自律的個人〉の理想 ——女主人公エドメの人物像から——

井下 継実*

はじめに

本稿は、ジョルジュ・サンド¹の小説が女性解放思想の文脈でどう位置付けられるかを明らかにするものである。小説『モープラ (Mauprat)²』(1837)の分析を通して、フランス革命の謳う「人間」の解放から零れ落ちた「女性」の解放をサンドがいかに構想したかを探りたい。『モープラ』には、主人公のベルナール(男性)が「獣」の状態から文明化されていく過程が描かれ、「教養小説」の特徴が強く見られる³。主としてベルナールが変貌を遂げる物語として捉えられる傾向にあるため、エドメ(女性)の変貌について詳細に描かれているにもかかわらず、エドメの人物像を中心に扱った先行研究は見当たらない。

* 大阪府立大学大学院 人間社会学研究科 博士後期課程 (人間科学)

¹ ジョルジュ・サンド (1804-76) はフランス革命後に活躍したフランスの女性作家。本名はオーロール・デュパン。貴族の父モーリス＝デュパンと民衆の生まれの母ソフィ＝ドラボルドのもとに生まれる。彼女はジョルジュ・サンドという筆名のもと、1832年に『アンディアナ (Indiana)』を出版して以来1876年に至るまで、約70篇の小説を世に出した。

² 『モープラ』は1837年の4月から6月にかけて、四回にわたって雑誌『両世界評論』に連載された。執筆開始は1835年の春であり初めは中編小説を想定していたものの、二年ほどの中断を経た後、最終的には長編小説となって1837年に発表された。時代設定は大革命前となっており、18世紀のフランス中部を舞台にしている。7歳で孤児になったベルナールは、野蛮で残忍な叔父たちが住むロッシュ＝モープラと呼ばれる館に連れてこられ、叔父たちのもとで生活する。17歳のとき、館に迷い込んできた同い年の女性エドメと一緒にロッシュ＝モープラを脱出し、エドメや彼女の父ユベールと一緒にサント＝セヴェール城で暮らすようになる。彼は何の教育も受けていないため、最初は意思をうまく表現することができず、エドメの発する言葉の真意を理解できない。しかし彼は、エドメやオベール神父や哲学者パシアンズなどから教育を受け、紆余曲折を経て、「言葉」を獲得するに至る。その後、パリの社交界での経験、アメリカ独立戦争への参加とアルチュールとの出会い、エドメが銃撃される事件とそれに関する訴訟、その後の大革命などを経て、彼はさらに成長していく。物語の構造としては、80歳を越えたベルナールが人生を回想し、教育や経験、それによる自身の成長について、自宅を訪ねてきた二人の若い聞き手に二日間にわたって語るという形式をとる。

³ ベルナールに関しての「教養小説」の側面については拙論『『モープラ』における〈劇場性〉』(『人間社会学研究集録』第12号, 2017年3月, 大阪府立大学大学院人間社会学研究科)を参照のこと。

い。サンドは自分の体験を作品のうちに書き込む作家であり、その点においても女主人公の体験や心理を分析することは相当の重要性を持つはずである。そこで本稿では『モープラ』を、エドメを主体にした「教養小説」として読むことで、サンドにとっての、女性をも包摂する「個人」の理想を解明することを意図している。

エドメの成育に関しては、父が「幸福のうちに、自主性 (indépendance) に基づいて⁴」育ててくれたとエドメ自身が語っている。「*indépendance*」は、ラルースの『19世紀大辞典』によれば「独立した状態、誰にも従属していない状態 (Etat de quelqu'un qui est indépendant, qui n'est sous la dépendance de personne)」とある。この「*indépendance*」という語は作中に10度登場するが、個人としての「独立心・自主性」といった意味では6例しかなく⁵、そのうちの4例がエドメに集中している⁶ことは注目に値する。自主性をもつ象徴的存在として、エドメは描かれているのである。また、作中に19例ある「*volonté*」という語が「意志」の意味で用いられる17例のうち、5例がベルナルンについて、6例がエドメについての用例となっている。他の登場人物にこれほど集中して用いられることはないことから、主人公二人の特徴といえよう。さらに、「モープラ」一族は「鉄のような意志 (*volonté de fer*)」(140)を持つという表現が1例あり、ここからも二人に「意志 (*volonté*)」という共通項があることは明らかである⁷。

本稿においては、こうした「*indépendance*」や「*volonté*」という語に着目し、「他者の支配を受けず、他者が作った規範や慣習、道徳に縛られず、自分の立てた規律に従って自らの意志で責任をもって行動する」状態を〈自律〉と捉え、そのような人物を〈自律的個人〉と定義する⁸。

⁴ George Sand, *Mauprat*, Garnier-Flammarion, 1969, p.310. [Maupratからの引用はすべてこの版によるもので、今後は本文中にページ数のみを記す。なお、小倉和子訳『モープラ』藤原書店、2005年を参考にした。]

⁵ 残りの4例は共和思想や国家に関わる「独立・自立」の意味で用いられている。

⁶ 残りの2例は、パシアンズとマルカスにそれぞれ1度ずつ用いられている。

⁷ その他の5例については、パシアンズに2例、「神の意志 (御心)」の意味で1例、ジャンに1例、一般的な「意志」の意味で1例あり、特定の個人には集中しない。なお、「*volonté*」の「意志」以外の用例は、2例とも慣用句的な用法である。

⁸ 〈自律的個人〉とはサンド自身の用語ではないが、『モープラ』において描かれる「*indépendance*」や「*volonté*」を備えた人物像エドメの内に、前述の〈自律〉した「個人」としての生き方が見とれることから、本稿ではそのような意味で用いている。

ベルナールが大きな変貌を遂げるのはエドメの導きによるが、「彼女 [エドメ] には『エミール』がしみ込んでいて、彼女は親愛なる哲学者の一貫した思想を実践していた」(152) とあるように、その指導方法はジャン=ジャック・ルソーの著作『エミール (*Émile*)』に倣ったものだった。サンドはルソーを愛読しており、思想的な影響を強く受けている。この他にもルソーに関する記述は作中に多く登場し⁹、教育や社会に関するルソーの思想が『モープラ』の根底に流れていると言っても過言ではない。

フランス革命後、女性はより男性の従属的存在として定式化されるようになった¹⁰。サンドにとっての理想的な女性像をエドメのうちに見ることで、ルソーが描かなかった——描けなかった¹¹——19世紀当時の女性の求める〈自律的〉なあり方を浮き彫りにすることが可能になろう。エドメの人物像と物語における変化を分析した後、その描写の意図について、サンド自身の体験を踏まえて考察し、『モープラ』全体を貫く「約束・誓い」というテーマに着目して、物語の新たな解釈を試みる。サンドの希求する〈自律的個人〉としての自己形成のあり方を『モープラ』のうちに探っていきたい。

1. エドメの自己形成

小説冒頭においては、エドメは教育者の立場にあり、完璧な女性として描かれている。しかし、物語が展開していくにつれ、エドメは脆弱な人間に変化していく。ベルナール以上に波乱に満ちたエドメの変貌がいかなるものか、見ていきたい。

⁹ « Rousseau », « Jean-Jacques », « Jean-Jacques Rousseau » という語が10例あるほか、「サヴォワの助任司祭の信仰告白 (la profession de foi de vicaire savoyard)」という語が2例 (53, 117)、『新エロイズ (*La Nouvelle Héloïse*)』が1例 (141)、『社会契約論 (*Contrat social*)』が1例 (53) と、それぞれ作中に効果的に組み込まれている。

¹⁰ 「絶対王政が崩壊し『人権宣言』が発表されても、女性には男性と同等の市民の地位はあたえられなかったし、女性の生活は基本的に変わらなかった。それどころか、革命の過程で強化された小生産者の意識は、女性の男性に対する従属をいっそう強めることとなった。」(水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房、1979年、p.241.)

¹¹ エミールにふさわしい理想的な女性ソフィーというのは男性にとって都合のよい存在でしかなく、その設定自体に限界を含んでいる。現に「ルソーの賛美者となった世の母親たちは、自分の娘をソフィーのようにというよりむしろエミールのように育てがちになった」。(アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史3 革命下の女たち』渡辺高明訳、大修館書店、1980年、p.83.)

(1) 規範に縛られない自由な女性

『モープラ』の特徴の一つは、女性が同年輩の男性を教育するという構図にある。この作品は、ルソーの思想に基づきつつも大きく異なる点もあり、その違いの一つは教育の最終目的にある。Suzanne Mühlhemannは、ルソーにとっての「社会構造に合致する現実」が、サンドの『モープラ』においては、「内在化され、個人の心理に応用されている¹²⁾」とし、むしろ対照的であると指摘している¹³⁾。さらに、ルソーとサンドの違いを次のように述べている。

ルソーは、ある種の合理主義に従属させることによって、個人の社会的条件にふさわしいように、最終的には所与の社会に適した人間を作り出した。サンドは個人としての人間 (*l'homme individu*) を作り出し、個性を開花し、生来の性質を十分にのばすことによって、幸福になる権利を与えている¹⁴⁾。

このように、Suzanne Mühlhemannは、ルソーが『エミール』において、社会に適応するための人間形成を目指したのに対し、サンドが『モープラ』で描き出したのは、個人としての人間の完成=完全な開花であったという重要な指摘をしている。ルソーの最終的な目的は理想の社会の完成であり、「エミール」はその近代社会の担い手=「個人」として創り出されるのである。但し、これはエミールとの比較においてベルナルの人間形成を分析した論文であり、『モープラ』におけるエドメの人物像に関しては言及していない。

もう一つの大きな違いは、「個人」の捉え方である。『社会契約論』の次のような表現に注目したい。

¹²⁾ Suzanne Mühlhemann, « *Mauprat*, ou la création de l'homme », *Présence de George Sand*, n° 8, mai 1980 [« George Sand et Rousseau »], p.8.

¹³⁾ 「『モープラ』においては、獣の状態に留まっている男性が、若く並外れた女性によって、能力の十全な開花 (*l'épanouissement*) に向けて導かれるという心理的成長が取り上げられている。サンドによれば、彼女の結婚において欠けていたもの〔高次の幸福と平等の要素〕を保証すべきものはまさに、結婚における自己の完成であった。(中略) ルソーの思想では、すべての人間に刻み込まれているように見える目的、また自己の十全な開花という目的に到達させるために、個人の才能や能力に応じて自己を伸ばそうとするものではない。いや、彼は個人を力づくで引き戻し、その社会的地位に留めておこうとする。」(*Ibid.*, p.7.)

¹⁴⁾ *Ibid.*, p.10. (下線は引用者。今後、引用における下線はすべて引用者によるものである。)

「各構成員の身体と財産を、共同の力のすべてをあげて守り保護するような、結合の一形式を見出すこと。そうしてそれによって各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由であること。」これこそ根本的な問題で有り、社会契約がそれに解決を与える¹⁵。

この「構成員」とは、別の箇所「主権者 (Souverain)」, 「市民 (citoyen)」とされている¹⁶。「市民」=家長がその権利と責任を負うわけであるから、ここでルソーが描く「主権者」, 「市民」が男性のみを指していることは明白である。もちろん男性のみで社会を維持することは不可能であるため、補助的な役割を担う〈妻〉, 生物学的な「再生産」を実質的に担う〈母〉が必要である。これらについては『社会契約論 (Du Contrat social)』(1762)では言及されていない。その代わりに同年に刊行された『エミール』(1762)において、ルソーはその制度を担う「市民」としてエミールを描き出すだけでなく、それを補助する人物の創出をも目指している。それこそがまさにソフィーであった。このように、ルソーは自身の理想とする社会制度を『社会契約論』において、その理想的な構成員=自律的な「個人」の創出については『エミール』で取り上げている。しかし、いずれにおいても女性は完全に排除されているのである。

ルソーが女性(=ソフィー)を補助的役割に徹する副次的な存在として描くのに対し、サンドの描く女性(=エドメ)は、強い意志を持った主体的な存在である。エドメは、主要な人物のうちでは唯一の女性登場人物である¹⁷。そして、先に触れたように、エドメはベルナルを指導する立場にある。男性を教え導くのが女性——しかも同年輩——であるということは、そもそも非常に特殊な例である。

¹⁵ Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat social, Œuvre complètes*, t.III, Pléiade (Gallimard), Paris, 1964, p.360. (訳はジャン=ジャック・ルソー『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳, 岩波文庫, 1954年, pp.29-30を用いた.)

¹⁶ *Ibid.*, p.362. (*Ibid.*, p.31)

¹⁷ 『モーブラ』において主要な役割を果たす人物としては、主人公二人のほかにオベール神父、パシアンズ、マルカス、アルチュールなどが登場するが、いずれも男性である。また、モーブラ族は物語冒頭で既に(エドメを除くと)ロッシュ=モーブラでもサント=セヴェールでも、男性しか生き残っていない。

エドメは、初めて登場したときには既に人間的に完成した女性とされており¹⁸、年老いたベルナルの回想においても「フランスでもっとも完璧な女性のひとり」(116)だった、との賞賛を受けている。さらに、エドメは規範に縛られることなく成長し、「女らしくない」と19世紀当時批判された乗馬すら自由にしている。彼女は、教育者としての資質をすべて持ち合わせた人物であると同時に、自由を享受する例外的な女性として描き出されている。

ルソーは『エミール』において、細心の注意を払ってエミールを自律的であるように描き出した。その目的は理想の社会を創出するための、理想的な人間の創出であった。そのために、「絶対的な教育者¹⁹」が、一人の孤児を「エミール」と名づけ、彼の人生に規則を設け、彼の行動すべてを検閲するという「教育」が構想されている。彼は男女の教育方法を明確に分離し、男子の教育を優先する。それは、エミールが教育を受けた後に初めて「自然の男子にふさわしい女性²⁰」の育て方について語るという構成からも明白である。ルソーは、女性の読み書き能力を軽視し制限する代わりに、女性固有の目的を与える。

そこで、すべて女性の教育は男性に関連させて考えられねばならない。男性の気に入る、役に立ち、男性から愛され尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、人生を楽しく快いものにしてやる、こういったことはいつの時代においても女性の義務なのであり、女性に幼少期から教えねばならないことだ²¹。

ルソーは、男性に気に入られ、男性の役に立つことを「女性の義務」とし、そのような女性を育てることを「女子教育」の目的としている。ルソーにとっての女性は男性の副次的な存在でしかなく、紛れもなく「モノ化」していた。そ

¹⁸ 「田園育ちの彼女は丈夫で、行動的で、勇敢で陽気だった。生まれながらに備えていたあふれるばかりの優美さに加えて、肉体的、精神的な健康が発するエネルギーのすべてを持っていた。」(117)

¹⁹ ルソーの思想においては、教育者は「その人自身が人間として完成していなければならない」とされ、完成された絶対的存在であるべきだとされている。Cf. Jean-Jacques Rousseau, *Emile ou de l'éducation*, Garnier-Flammarion, Paris, 2009, p.130. (訳はジャン＝ジャック・ルソー『エミール』(下)今野一雄訳、岩波文庫、1964年、pp.175-176を用いた。)

²⁰ Rousseau, *Emile ou de l'éducation*, pp.523-524. (『エミール (上)』p.20-21.)

²¹ *Ibid.*, p.526. (*Ibid.*, p.26.)

のような認識に関して、アラン・ドゥコーは次のように述べている。

これこそまさに矛盾であり、女性に対して自然へ帰るように説きながら——そして、彼女らは彼の話に耳を傾けたのだが——、結局は女性を最高の存在まで高められた男性のための「道具」と見なしているのである²²。

サンドの描く『モープラ』におけるエドメは、ルソーがエミールの付随的存在かつ対象物として描いたソフィーとは極めて対照的な女性である。エドメの人格を形成した教育法については多くは語られないものの、次のような箇所からその教育方針の一端が窺える。

幼時期に母を失ったエドメは、娘への信用と思いやりに溢れた、無頓着な父親によって若い靈感の赴くがままにされたため、ほとんど独りで自己形成した。彼女に初聖体をほどこしたオベール神父も、彼自身が心をとられていた哲学者たちの書物を読むことを少しも彼女に禁じなかった。(116)

指導者による検閲なしに、読書や思想の自由が保障されているエドメは、ソフィーはおろか、エミール以上の自由を享受している²³。それは、少女が哲学者の書物を読むことなどあり得なかった時代において、誰に咎められることもなく哲学書を読める環境にあったサンド自身の少女時代と重なる。そのような境遇が、作品におけるこのような描写を可能にしているということに留意しつつ、次はそのようなエドメが〈自律性〉を失う過程とその意味を探っていきたい。

(2) 公的空間における女性の苦境

エドメは物語における主人公であり、教育者側の立場にある。『エミール』

²² アラン・ドゥコー、前掲書、p.81.

²³ エドメの場合には、父親からの影響が少なただけでなく自己のモデルとなるはずの母親を早くに亡くしていたことが〈自律性〉につながったのだろう。ベルナルルの方も同様、早くに孤児になったため、教育による制限を受けなかったといえる。

における「先生」のように絶対的な教育者を彷彿させるエドメであるが、興味深いことに、エドメのこの立場は恒久的なものではない。彼女は心身ともに危機的状況に何度も陥り、銃撃によって自身が失語状態に陥るなど、様々な困難を経験する。本節では、彼女が経験するとりわけ大きな苦難である「孤立 (isolement)」, 「自己喪失 (aliénation)」について、順を追って見ていきたい。

エドメが危険な目に遭うのは——最初にロッシュ=モープラに迷い込んだときもそうであったが——いつも独りでいるときである。なかでも、アメリカ独立戦争に志願兵として赴いたベルナルとの七年もの離別の間、エドメは社交界において「孤立」状態に陥る。年ごとにエドメの「孤立 (isolement)」(209)が強まるなか、エドメに恋をして拒絶されたある青年がその恨みを晴らすために「復讐する」(209)など、エドメにとって不利なできごとが重なるのである。

彼〔青年〕は、エドメが殺し屋に誘拐されたことを聞きつけ、彼女がロッシュ=モープラでの乱痴気騒ぎで一夜を過ごしたという噂を流した。(中略)やがて彼女は彼らの暴力の犠牲になったということにされてしまった。消えることのない汚点を刻印された彼女と近づきになろうという人は、もはやいなかった。(209-210)

こうしたことにはすべて信憑性があったため、一般の人々 (public)に真相を信じてもらうのは困難だった。エドメがしかるべく行動し、愛することのできない男性〔ベルナルに出会う前からの婚約者ド・ラ・マルシュ〕との結婚を承諾して、意地悪な噂をおさめようとしないので、真相はいつそう嘘っぽく聞こえたのである。これが彼女の孤立 (isolement)の理由だった。(210)

さらに、ド・ラ・マルシュがエドメのもとを去ったことが、婚約破棄の疑惑やその原因など、「好奇心による多くの詮索」(209)を引き起こした。社交界の誹謗中傷、とりわけロッシュ=モープラに関わる性的な中傷によって、エドメは苦しめられる。この時、真実を知るベルナルは戦地のアメリカ大陸にいたため、このような恣意的な眼差しによるエドメ像はまことしやかに伝えられ、

拡散してしまう。

「孤立 (isolement)」という語を考える際、「孤独 (solitude)」との違いを考慮に入れておく必要がある。サンドは « isolement » と « solitude » という語を明確に区別している。作中における使用例からも、「isolement」は、「隔絶された、孤立状態に置かれる」といった受動的意味合いを帯びており、見捨てられた者の寄る辺なさが感じられる。一方、「solitude」は他のものによって揺るがされない自らの意志が前提となっている²⁴。ベルナールと出会う前、エドメはルソーの思想を理解する「魂の共感者」(117)を探し求めていたが得られず、「孤独 (solitude)と詩的夢想への愛」(117)によって自らの心を慰めていた。エドメに関する表現としては、ベルナールがアルチュールに「僕への愛のために独りで (solitude)生きられるほど、彼女が僕のことを愛しているなんてことがあり得るだろうか？」(186)と、彼女の結婚の可能性について尋ねる場面にある²⁵。

『モーブラ』では、社交界という公的空間における「孤立」＝「女性であるがゆえに課せられる社会的抑圧」が詳細に描かれている。私的空間では、独立心をもって自由にふるまえたエドメが、公的空間においては〈自律性〉をはぎ取られ、従属的な位置に追いやられてしまう。これが、自己喪失の第一段階である。

次は、第二段階について見ていきたい。場面は、社交界と同様に重要な公的空間として印象深い、法廷である。法廷が舞台となるのは、エドメの父が催したキツネ狩りの日に、エドメが——ここでもやはり独りになった瞬間——何者かによって銃撃されるからである。銃撃のショックにより彼女は発語能力を失い、身振りだけでしか意思表示ができなくなる。それは脳の激しい興奮により「苦痛の記憶を呼び覚ますような言葉を一言でもかけると、身体が震え出す」(283)という異常な精神状態であった。銃撃の嫌疑はベルナールにかけられ、エドメは法廷でその証言を求められるのであるが、彼女はベルナールの名を聞

²⁴ なお、「solitaire」は『モーブラ』に7度登場するが、いずれも「隠者」の意味であり、すべてパシアンスのことを指している。

²⁵ « solitude » という語の用例は作中に6例ある。後の4例については、パシアンスのガゾー塔での静かで心穏やかな独居について3例、もう1例は、監獄にいて周囲からの影響を受けないベルナールの状態についての描写である。

くだけで「大きな叫び声をあげて気絶」(285)してしまう。このようなエドメの症状に使用されている重要な語が「*aliénation*」である。この語は作中に3度登場するが、そのうちの2例がここに集中している。法廷において裁判長がエドメの精神状態を「自己喪失状態 (*un état d'aliénation mentale*)」(297)と述べる場面と、オベール神父がエドメの精神状態を「病的な自己喪失の状態 (*l'état d'aliénation de la malade*)」(301)と呼ぶ場面である。

サント=セヴェールという私的空間では自由にふるまえた彼女は、社交界という公的空間における他者のまなざしや中傷によって「孤立 (*isolement*)」状態に追いやられる。さらに、物理的な暴力や誤った解釈が引き金となって「自己喪失 (*aliénation*)」状態に陥る。この時も、彼女の回復を妨げ、むしろ症状をより悪化させたのが、病床での「精神的な孤立状態 (*L'isolement moral*)」(283)であった²⁶。エドメは公的空間において「自己喪失」し、社会との関係を遮断されることで公的空間からの「孤立状態」に陥る。さらに法廷における「言葉の暴力」によっても苦しめられ、周縁部へと追いやられ、完全に「疎外」されてしまうのである。

(3) 女性が自分の言葉で語る——解放のための自己開示

ここまで見てきたように、サンドはエドメの「孤立」と「自己喪失／疎外」を通して女性が抑圧される姿を描き出している。それは、サンド自身が公的空間で感じた生きづらさの投影とみなすことができよう。既に触れたように、エドメは「人々の噂 (*bruits publics*)」(301)という主体なき声によって非常に苦痛を味わう。噂が否定されないことで、真実は宙吊りにされ、隠蔽される。一方、噂の方は繰り返されることで、際限なく肥大していくのである。

最終的にエドメは錯乱状態から回復し、自己を取り戻すが、そこで重要な役割を果たすのが彼女の「告白」である。

みなさんは私の最も個人的な感情について説明を要求しています。私の心の神秘的な部分にまで侵入して、私の羞恥心を苦しめ、神のみに属する権

²⁶ さらに、ベルナールに悪意を抱く侍女ブラン嬢が傍にいたこともエドメの心理状態に悪影響をもたらしていた。

利を不当に行使しています。(中略)あなた方は、女性の慎みや自尊心に反する告白(aveu)を私に強要なさっているのですから。私の行動に関してあなたが不可解に感じていること、あなたが、ベルナールの過ちと私の恨み、彼の脅迫と私の恐怖のせいにはしているものはすべて、ただ一つの言葉で説明されます。私は彼を愛しているのです(Je l'aime !)。(298)
[強調は著者自身]

法廷における場違いな証言=エドメの愛の「告白」は、強要されたものであるとはいえ、紛れもなく自分の選んだ言葉によって本心を打ち明ける行為である。「告白・打ち明け」は、「aveu」以外にも「révélation」という語で表されるが、エドメの真実の「告白(aveu)」に至る直前に「révélation」という語が4度連続して用いられている。裁判長とエドメの会話である。

「あなたは、自分がパシアンズじいさんや侍女のルブラン嬢、おそらくオペール神父にも行った告白(révélation)を、自己喪失状態のせいにはしているようですが」

「私は何の告白(révélation)もしておりません」とエドメは確信をもって答えた。「立派なパシアンズにはもとより、尊敬すべき神父様にも、下女のルブランにも。もしも、熱にうなされて人が発する意味のない言葉を、告白(révélation)と呼ぶのなら、夢のなかで私たちを怖がらせる人物すべてに死刑を宣告しなければなりません。自分が知らないことについて、どんな告白(révélation)ができるというのでしょうか?」(297) [強調は著者自身]

サンドはここで、強調によって「révélation(s)」と「révélation」を区別している。前者は、意図せずして暴かれるもの、他者によって恣意的に解釈される「偽の告白」を意味し、イタリック体で強調された後者は本来の意味での「告白」として用いられている。とはいえ後者も、文脈上は全否定や反語的な意味となり、結果的に強く否定されてしまうものに過ぎない²⁷。

特筆すべきは、エドメが真実の告白の前に、その他のあらゆる告白を否定していることである。自己の喪失と同様に、自己の回復も二段階に分かれている

のである。まず、自己喪失状態からの回復として、偽の「告白」を否定するという段階がある。自身にまつわる風評を一掃し、他者の眼差しに囚われた自己を解放する。これは、「自己喪失=失語」の状態から、自己と言葉を取り戻すという回復である。その次に、「孤立」状態からの回復として、エドメは自らの眼差しで見た世界について語り、真の「告白」によって真実を公開する²⁸。彼女は、公的空間において自己を開示することによって、さらに自分自身を解放するのである。

法廷という公的空間²⁹において私生活について語ることは、当時の道徳観念からすると非常に大きな危険性をはらむ行為であり、現在における想像をはるかに超えた羞恥心が予想される³⁰。完璧にみえるエドメがなぜこのような苦しみを経験しなければならなかったのか。その理由の一つとして、苦難に抵抗してまで自己の心情を公言することは、より強い自我の発現をもたらすからだと想定できる。人間の「自己改善能力 (perfectibilité)」を信じるサンドにとって、誰もが新たな成長を遂げなければならない。ベルナールが獣から人間に変貌するのと同様に、人間であったエドメが一度〈自己喪失=失語〉の状態に陥ってまた人間に戻ることで、立場の揺らぎを描き出せる。だからこそ、一旦確立されていたかに見えたエドメの〈自律性〉が公的空間において失われ、それを主体的に取り戻すという物語が編まれたのであろう。

2. 新しい関係構築のために

サンドは『モープラ』の執筆を一度中断しており、その時期には自身の別居訴訟を経験していた。作中の裁判の場面にはサンドの個人的な体験も多分に含

²⁷ 同様に「告白 (aveu)」という語も、エドメの「真実の告白」を除いては両義的なものに留まり、自身の主張を行うという意味での主体的な意味を担っているわけではない。

²⁸ 神父に対する告白については別に « confession » = 告解という語が用いられ、区別されている。作中に6例ある。

²⁹ 法廷の場面は、訴訟が定められた策謀通りに進行するいわば舞台のようなものとなっており、傍聴人=観客によって是非が判断される。傍聴人たちはざわめいたり足踏みをしたり押し黙ったりして賛否の意思表示をし、場の雰囲気にも圧倒的な影響を及ぼす。

³⁰ 公的空間で語るということには、サンドが作品を書いて公に発表することも含まれよう。女性作家に対する偏見については、村田京子『女がペンを執る時——19世紀フランス・女性職業作家の誕生』新評論、2011年、pp.23-25を参照のこと。

まれていると考えられる³¹。また、別居訴訟に限らずサンドは自身の経験やそれに関連する思想や理念を作中に「書く」作家であった³²。ジェンダーの文脈でジョルジュ・サンドについて言及する際、彼女が男装をしていたということがよく引き合いに出されるが、その理由としては、ノアンでの習慣、経済的・機能的な理由、知的好奇心を満たすため、社会的な制約による男装などが挙げられる³³。また、男性の筆名を用いたことやその理由も含め、サンドの性については様々な解釈がなされている。それに関して、新實五穂は次のように整理している。

サンドと性別二元論の問題に関する最近の研究動向としては、男性名の筆名や書記法を主な根拠として、二つの異なる解釈が産まれていることが挙げられる。一つは、サンドにおいては二つの性が混同・融合して性差が消滅し両性具有となったとする説である。もう一つは、欠点も含め女性の性質を明白に有した上で、作家としては男の立場に立つサンドを、一つの性の中に男性性と女性性を備える「双性性」の持ち主とする説である³⁴。

サンドは当時、まるで「両性具有」的な存在であるかのように扱われており、あるいは現在でもそのように見られる傾向にある。しかし、「両性具有」、「双性性」などと名づける行為は、そもそも「個人」を〈男性性／女性性〉のもとに分けてしまうことを前提としてはいないか。サンドにおいては、性別は人格

³¹ 1836年7月10日付けのマリ・ダグー伯爵夫人に宛てた手紙で、サンドは自身の訴訟について「腐臭と汚辱に満ちた破廉恥な裁判 (la puanteur et l'ordure d'un procès scandaleux) が私を待ち受けている」(George Sand, *Correspondance*, Tome II, édition de George Lubin, Classiques Garnier, 2013, p.478.) とまで述べている。それはとりわけ作中でエドメが「尋問」により、法の名の下に聴衆の面前で自分の私生活について内面の吐露を強要される場面の心理に結びつけることができよう。

³² 「サンドは書くことを通してみずからのアイデンティティを探求し、思うところを社会に発信した作家である」ため、「サンドの場合、その作品をすべて彼女自身の伝記的要素で説明することは無理だとしても、作家と作品を完全に切り離すことは難しい。サンド研究において、ときとして作家自身が作品より全面に出されてしまうことがあるのは、そのような理由によるものだと思う」と小倉氏は指摘している。(小倉和子, *op.cit.*, p.46.)

³³ 池田孝江『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』, 平凡社, 1988年, pp.85-86, pp.141-151, pp.196-197を参照。

³⁴ 新實五穂「性を装う主人公『わが生涯の記』『ガブリエル』」, 日本ジョルジュ・サンド学会『200年目のジョルジュ・サンド』所収, 新評論, 2012年, pp.36-37.

や能力の差を語るうえで、あまり重要なものとして扱われていないように思われる。『モープラ』においても、サンドは〈未開／文明〉、〈感性／理性〉、〈女性性／男性性〉などの双方について、肯定的側面と否定的側面を描いている。ここからはエドメの人物像のジェンダー的側面を見ていきたい。

(1) エドメ——サンドの理想の「個人」

作中において時折描かれるエドメの男性的側面は印象的である。『モープラ』において« virile »という語が女性のエドメにしか用いられていないことは、既にNigel Harknessが指摘しているが³⁵、エドメと初めて会ったベルナールは彼女の持つ「男性的な大胆さ (hardiesse virile) のようなものを備えた若さと健康」(104)を彼女の「美しさ (beauté)」(104)として認識していた。また、アメリカにいるベルナールにエドメが書き送った手紙の「文体の気品や男性的な正確さ (précision virile) から浮き上がる深い思慮や完璧な誠実」(185)は、エドメと全く面識のないアルチュールの心をも打つ。このように、エドメは女性でありながら、ベルナールの目には自身と「同い年の青年 (jeune homme)」(209)のように映る。

しかし、アメリカ独立戦争が終結し、サント=セヴェールに帰還したベルナールはエドメの変化に気づく。以前は「運動と外気」を何よりも欲していたエドメが、室内で「針仕事」(204) = 「女性的な仕事 (occupations féminines)」(204)をしつつ、衰えた父の看病をするという「根気と忍従」(204)を要する生活を送っていた。その変貌ぶりを目にしたベルナールは、「彼女 [エドメ] は自分の血液の循環までも変えてしまっていた」(205)と感じている。ただ、それは従来の規範に基づく「女らしさ」に転向したわけではない。ベルナールはエドメの内に、「以前の彼女と新しい彼女 (l'ancienne et la nouvelle) と、ふたつの人格 (deux personnes)」(205)を感じ取り、彼女の内面に「完璧な理想 (l'idéal de la perfection)」(205)を見出したのである。

このようなエドメの人物像は作家サンドの姿とも重なる。サンド自身も子どものころから乗馬を好み、生まれ育ったノアンで馬に乗って自由に行動してい

³⁵ Nigel Harkness, « Une masculinité trop visible et les enjeux de la fraternité *queer* dans *Mauprat* de George Sand (1837) », *Masculinités en révolution de Rousseau à Balzac*, l'Université de Saint-Étienne, 2013, p.235.

た。サンドの書簡集から彼女の衣生活に関する分析を行った新實五穂は、これまでの批評がサンドの男装を女性解放思想の投影と見なし、男女同権と結びつけて考える傾向が強いとしたうえで、次のように結論づけている。

書簡集からは、サンドの日常的な男装について、男性と同等の権利を主張するため、男性の模倣を懸命に行ったことを意味するような内容は、少なくとも見出せず、女性性を表出しないことを目的とし、女性性についての詳細な知識に支えられていたことが明らかとなる。その意味では、気取りや虚栄心のない、媚を売らない普通の簡素な女性としての装いの延長線上に、彼女の男装を位置付けられるのである³⁶。

サンドの男装は、自らを構成する一要素——例えば女性であること——によって自分の人格そのものを規定されることへの違和感によるものともいえよう。サンドは「男」や「女」, 「第三の性³⁷」などと彼女を規定する男性たちの言説を難なくかわす。例えば、彼女は自身の男装を揶揄するアドルフ・ゲルールの手紙³⁸に対し、1835年5月に次のような返信をしている。

ご安心なさってください、私は男の尊厳を狙ってなどいません。女の卑屈より男の尊厳がはるかに好まれるなんて、私にはあまりにも滑稽に思われます。けれども、私は今日、そして永久に、すばらしくて完全な自主性 (indépendance) ——あなたがた [男性] だけが享受する権利を持つとお考えの——を手に入れるつもりです³⁹。

³⁶ 新實五穂「書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活——男装と女性性の関係——」『日本家政学会史』第54号, 2003年, p.550.

³⁷ バルザックをはじめ男性作家たちは、サンドを知れば知るほど彼女が男か女か判断に迷うと語っていた。フロベールに至っては、サンドへの手紙に「『第三の性』の貴方よ」と記したことが知られている。(西尾治子「変装するヒロインたち——『アンディアナ』から『歌姫コンシュエロ』『ルードルシュタット伯爵夫人』へ」, 日本ジョルジュ・サンド学会編, 『200年目のジョルジュ・サンド』所収, 新評論, 2012年 p.89.)

³⁸ サンドが反論するのは、ゲルールの手紙の次のような部分に対してであろう。「男になろうとしないでください。なぜなら、あなたは自分の性の性質を失うことになるし、別の性の性質を帯びることもできないのですから。あなたは二つの性の間で滅びてしまうでしょう。」(Correspondance, Tome III, 2013, p.880.)

³⁹ *Ibid.*

さらには「私を男性と見るか女性と見るかは、どうぞあなたの望むように」と述べ、「私は一個の存在 ([je] suis un être)⁴⁰」[強調は著者自身]だと宣言している。「un être」という語は、男にも女にも使用でき、「存在」そのもの、さらには「本質」をも表す。自己という規定しきれないものをそのまま肯定する自由なサンドにとっては、男装というセンセーショナルな行為すら、自分らしくあるための一つ的手段にすぎない。サンドにとっては、何を着ようが何をしようが一個の「存在」であることは変わらず、女である以前に「人間」なのである。

サンドは男性的な性質を身につけたり、男性に同化したりすることによって「自律的」であろうとするのではない。彼女の男装はむしろ、自らが「装う」ことで、〈男らしさ／女らしさ〉というものが仮構にすぎないことを示すための実践とも取れるのである⁴¹。

エドメを通してサンドが描き出したものとは、一人の「個人」の完成ではないか。エドメが「年齢やおそらくは性別を越えた良識」(117)を持つ人物として描かれていることから、〈男らしさ／女らしさ〉を兼ね備えるというより、むしろその区分すら拒否する姿勢が感じ取れる。そうした区分とは別次元の「統一体としての自己」である。サンドには、性別をはじめとする二元論的な束縛によって自由を奪われることに対し、強い抵抗感があった。性別二元論を否定し、その均衡・融合を求めるサンドの理想を体現する存在が「エドメ」なのだ。19世紀という性別役割が強化された時代にあって、既存の枠組みに囚われない自由、自らの望む道に進むことを妨げられない自由を持つサンドは、紛れもなく〈自律的〉な一個の人間であった。続いて、サンドが女性に限定して「個人」の理想を考えていたわけではないことを見ていきたい。

(2) 対等な「個人」間の相互教育

既に触れたように、ルソーの思想では「絶対的な教育者」が必要であった。一方、エドメは「絶対的な教育者」の立場にあるわけではない。『モープラ』において興味深いのは、〈教育者／学習者〉の関係にある主人公二人の立場が

⁴⁰ *Ibid.*

⁴¹ ただ、自らが男装によって自由にあふれる一方、それにより「男性」の特権という規範や制度自体を強化してしまいかねないという側面があることにも注意が必要である。

常に揺れ動くことで、力関係が固定化されないことである。それは、言葉の獲得というベルナルの試練⁴²と同様に、エドメも言葉を取り戻すという試練を乗り越える必要があったこととも関わっている。その試練は両者にとって生命の危機を伴うものであった。

『モープラ』には同年輩の者による教育が描かれていることが特徴的であるが、とりわけ学習者（＝ベルナル）が自身の成長を語るという点は独特である。このことは教育者（＝エドメ）が絶対的存在として君臨するのではなく、学習者の側も積極的な「主体」となり得ることへの解釈の布石となっている⁴³。『エミール』における二者の関係は、教育者が学習者を専ら「導く」だけの上から下への「垂直的關係」を成し、学習者は教育者の管理する領域を脱することはなかった。それに対して、ベルナルとエドメの間には双方が主体となり得る「水平的關係」が成立している。〈ベルナル／エドメ〉の構図は、その時々に向面する問題への対応によって揺れ動くのであり、管理された枠の中で、教育者の期待通りに行動する従順なエミール⁴⁴とは正反対である。エドメが実践する教育は、ルソーのように「自由に見える隷属状態⁴⁵」を作り出すものではなく、本当に「自由」が確保されている。「水平的關係」については、小倉和子が、モチーフの共通したポーモン夫人の『美女と野獣』と比較して、次のような指摘をしている。

⁴² ベルナルの言語の獲得については、拙論「〈言葉〉の物語としての『モープラ』」（『人間社会学研究集録』第11号、2016年3月、大阪府立大学大学院人間社会学研究科）を参照のこと。

⁴³ ベルナルは「語り手＝視点人物」であり、さらに自ら見聞きしたことから判断する。そのため、ベルナルは学習者であるにもかかわらず「見る」側、教育者のエドメが常に「見られる」側となる。

⁴⁴ ルソーの『エミール』における教育実践は、教育者が想定する枠内に限定された「主体性」にしか関わっていない。彼は「生徒をその年齢に応じて取り扱うがいい。まず彼をその場所において、そこにしっかりとどめておき、そこから抜け出せないようにすることだ。そうすれば、知恵とはどういうものかを知る前に、子どもはもっとも重要な知恵の教えを実行することになる」（Rousseau, *Emile ou de l'éducation*, p.124. [『エミール（上）』, p.164.]）と主張する。

⁴⁵ エミールの制限された主体性に関しては、ルソー自身が次のように記している。「生徒がいつも自分は主人だと思っているながら、いつもあなたが主人であるようにするのがいい。見かけはあくまで自由に見える隷属状態ほど完全な隷属状態はない。こうすれば、意志そのものさえとりこにすることができる。（中略）もちろん、かれは自分が望むことしかしないだろう。しかし、あなたがさせたいと思っていることしか望まないだろう。あなたがまえもって考えていたことのほかにかれは一步も踏みだすことはないだろう。なにを言おうとしているかあなたが知らないでいてかれが口をひらくことはないだろう。」（Rousseau, *Emile ou de l'éducation*, pp.168-169. [『エミール（上）』, p.248.]）

『モープラ』に仙女の魔法は介在していない。ベルナールの野獣性はあくまで彼自身の問題である。そして決定的に異なるのは、ポーモン夫人の野獣が心優しい娘の帰還をひたすら受け身に待つのにたいして、『モープラ』では、エドメの愛にふさわしい人間になろうとするベルナール自身の強い意志が強調されている点である。そこには、男女の愛の双方向性、対等性を理想とするサンドの思想が反映されていると思われる⁴⁶。

ベルナールは、エドメが自分を認めてくれる瞬間を待ちつつ、彼女にふさわしい人物になろうとする。エドメの側も、ベルナールへの思いを秘めつつ、ひたすら静観し、彼が人間として完成する瞬間を待つ。「あなたが私の目にだんだん偉大になっていくにつれて、私は待てるだろうと感じた」(310)とエドメは後に語る。学習者の自発的な成長には、「待つ」姿勢が必要不可欠である。待つことは忍耐を要するが、忍耐と希望をもって共に待つ二人の姿勢こそが、困難を共に越えることを可能にするのである。そして、その際に重要なのは、何を目指して「待つ」のかということである。サンドが目指したものは、ルソーの「男性中心」思考を転倒させた形の「女性中心」ではない。一方の意図のみが有効なものとして強制されるのでは、争いは避けられないだろう。エドメもベルナールも、双方が互いに成長を目指すなかで、積極的に待ち合うのである。

ここまでは〈ベルナール／エドメ〉の関係について見てきたが、『モープラ』において、ベルナールは愛する女性エドメとの関わりだけで成長したのではない。アメリカ独立戦争において出会う男性アルチュールも、「言葉」によってベルナールの「心の暗い嵐に知恵の光 (lumière de sa sagesse) を与え」(187)てくれる同年輩の登場人物である。アルチュールとの関わりによって、ベルナールは人間として完成することになる。〈ベルナール／アルチュール〉の関係について少し見ていきたい。

アルチュールの教えで最も重要なものは、「自分自身を知り、自分が感じたことについて熟考する習慣をもつ」(182) ことであった。彼との対話のなかで、

⁴⁶ 小倉和子「変身譚に読み取る平等への希求——『モープラ』をめぐって」、日本ジョルジュ・サンド学会『200年目のジョルジュ・サンド』所収、新評論、2012年、p.45。

ベルナールは自分を知り、自分の心をコントロールして能力を「よい方」に向け、「欠点までも利用できる」(182)ようになった。アルチュールについて、ベルナールは次のように告白している。

私は、神が相棒 (compagnon)として、また友として与えてくれた有能な青年との親交により、自分の精神を培う幸運に恵まれた。(180)

アルチュールはベルナールの唯一の「戦友 (compagnon d'armes)」(281)であったとの描写もある⁴⁷。この「compagnon」という語はその女性形「compagne」の形——「私の人生の清らかな伴侶 (compagne)」(312)——で、エドメにも用いられる。サンドは「compagnon/compagne」という同じ意味を表す語を用いることで、アルチュールとエドメがベルナールにとって同じ役割（同年輩の異性の指導者としてのエドメに対し、アルチュールは同年輩の同性の指導者）を果たしていることを明らかにしている。

ベルナールとエドメがいずれも貞節を守っているということにも対等性が現れている⁴⁸。アルチュールが「compagne」について語る場面——「自主の精神 (L'esprit d'indépendance)、美德の観念、義務を愛する心といった気高い心をもつ特権は、伴侶 (compagne)には必要なものだ」(186)——もある。サンドにおいては、男であれ女であれ、相手を補助的存在として固定せず、各個人が「自律性」をもってそれぞれの責任の及ぶ範囲を全うするのである。物語の終結部において、老ベルナールは聞き手の青年に向かって次のように勧める。

人は皆、何らかの価値をもつためには愛される必要があるが、それぞれに違ったやり方でなくてはならない。不屈の寛大さが必要な人もいれば、一貫した厳しさが必要な人もいる。各自にふさわしく、それでいて万人に共通のものである、教育の問題が解決されるのを待ちながら、互いに欠点を直し合うことに専念しなさい。(314)

⁴⁷ アルチュールはベルナールが「同年の男性に対する私の最初の友情」(181)を結ぶ存在である。

⁴⁸ 『エミール』の続編とされるルソーの「エミールとソフィーあるいは孤独な人々」においては、ソフィーがパリで墮落し、貞節を守りきれなかったことが破綻の原因とされている。

「互いに欠点を直し合う」という語が表すのは、年齢・性別の違いを越えた「個人」の対等な関係である。その具体的な方法として、サンドは老ベルナールの口を通して「互いに大いに愛し合うことによって」(314)ということを示している。愛に基づく人間関係こそが、サンドの理想とする相互教育のあり方であった。

(3) 〈はじまり〉を可能にする赦しと約束

『モープラ』執筆当時、夫カジミールとの不幸な結婚を経て、別居訴訟のなかにあったサンドは、精神的な同志となりうる理想的な伴侶を求めていた⁴⁹。『モープラ』には、親の決めた結婚ではなく、主体的な個人と個人との間における約束としての結婚が描かれている。しかし、その実現には数々の困難を越えねばならない。

Jean-Pierre Lacassagneによれば、作品名にもなっている主人公二人の姓「Mauprat」という名は、ラテン語の「Male pratum」に由来するもので⁵⁰、「悪い畑、悪い草」を意味する。モープラ一族は、ベルナールの属する「ひかがみ切り (Coupe-Jarrets) [強調は著者自身]」(64)とあだ名される本家と、エドメの属する「頭割り (Casse-Tête) [強調は著者自身]」(64)とあだ名される分家に分かれ、いずれも人殺しの家系である。エドメ自身も「私たちの家系は人殺し」(309)で、それは「子ども時分からの習慣」(309)だと語っている。『モープラ』には廃墟や古城、呪いや幽霊など、^{ロマン・ノワール}暗黒小説のモチーフが織り込まれており、これらは作品の特徴⁵¹の一つでもある。

ところで、暗黒小説においては、呪われた男性の罪を、清らかで純潔な女性が贖うという設定が通例である。しかし『モープラ』ではエドメも呪われた血を引いており、ここにもサンドの独自性が見出せる。それゆえ、主人公二人には「赦し」が必要となり、殺し屋モープラの罪、その血による清算、通過する死の淵や恐怖の体験、二人にはそれぞれ償いとしての苦難が与えられる⁵²。同

⁴⁹ 1851年に加筆された『モープラ』のNoticeにおいて、サンドは執筆動機が「永遠の絶対的愛 (amour exclusif, éternel)」(29)を描くことにあったとして、当時(1837年)を振り返っている。

⁵⁰ Jean-Pierre Lacassagne, préface à l'édition Folio de *Mauprat*, 1981, p.27.

⁵¹ 『モープラ』と暗黒小説との関係についてはJean-Pierre Lacassagne, préface à l'édition Folio de *Mauprat*, 1981, pp.18-19を参照のこと。

じモープラの血を引くという設定により、それぞれに試練が与えられるというところにも、両者の対等性が現れている。また、エドメには〈聖女⁵³／生来の「罪人」〉という二重性が付与されており、その両面を持つことから独特の存在となっている。数々の苦難についてエドメは、「英雄的な愛 (amours héroïques)」(310) に至るために自分たちは「試練を受けた」(310) のだと言う。物語終盤におけるこのような記述から、男のベルナルルだけではなく、女のエドメも「英雄的」に戦わなければならなかったことがわかる。それは単なる抑圧や忌まわしい苦難に留まるものではない。

また、『モープラ』では互いの「約束」による新しい関係の構築が描かれる。二人の苦難は、その〈はじまり〉を可能にするために乗り越えなければならぬ「試練」だったのである⁵⁴。ベルナルルとエドメの関係自体も、ある約束を誓い合うことを前提として成立する。

「誓います (Je jure)」とエドメは言った。「あなたのものにならないうちは誰のものにもならない、と。」「そうじゃない。誰かのものにならないうちにおれのものになる、と誓え。」「それは同じことです。誓います (je le jure)」と彼女は答えた。「福音書にかけて？キリストの名にかけて？あなたの魂の救済にかけて？あなたの母親の棺にかけて？」「福音書にかけて、キリストの名にかけて、私の魂の救済にかけて、母の棺にかけて」(84)

「私の約束 (promesse) とその遂行は私たちの間の秘密だと誓ってください

⁵² エドメはベルナルルとの約束を命がけで守り、約束を破って彼以外の男性と結婚するくらいなら死のうと思っていたことを告白する。告白によって〈自己喪失／疎外〉状態から自由になるエドメと、エドメとの別離とアメリカ大陸における戦功が必要となるベルナルル、それぞれに課せられた試練は、モープラの末裔であるがゆえの、罪を除くための「禊」とも捉えられよう。

⁵³ エドメは「忍耐強い好奇心と不屈の意志 (patiente curiosité et la volonté inébranlable)」(243) を持つ。彼女はベルナルルの成長を見守る間、常に厳しさを維持するが、それは幸福な将来のために必要なものであり、自身も「あなた [ベルナルル] のものにならないうちは誰のものにもならない」(84) と誓った通り純潔さを保ち、獣の状態から理性をもつ人間の状態に彼が成長するまで、忍耐して待つ。強い意志と愛情深さを併せ持つそのような彼女の性質は、彼女の住む土地の名である「厳しい聖女 (Sainte-Sévère)」そのものである。

⁵⁴ これは『モープラ』という小説特有のものではなく、普遍性を帯びているように思える。複数の主体が共生するためには、ある程度の妥協が必要である。人格がある以上、生来のものであれ、生育環境によるものであれ、各々が必然的に何らかの特性を持つからである。

い (*vous allez jurer*). 父がそのことを知ることはなく、誰も父にそのことを口外しない、と。」「この世で誰も、約束が守られさえすれば、誰がそんなことを知っている必要があるんだ？」彼女は誓いの言葉 (*formule de serment*) を私に繰り返させ、それから私たちは互いの誓いのしるしとして手をとりあって (*les mains unies en signe de foi mutuelle*) 外に駆けだした。(84)

とはいえ、この最初の約束は脅しを含むものであるため、対等な立場によるものではない⁵⁵。「約束」の場面において、サンドはそれと混合されがちな「条件」を注意深く区別して描いている。それを示す一例として、エドメの父ユベールが財産を保証するためにベルナールに条件を告げる場面を挙げておこう。ユベールが課したのは、身分相応の教育を受けるという「たったひとつの条件」 (*une seule condition*) [強調は著者自身] (108) であったが、ベルナールは「条件 (*condition*) という言葉 [強調は著者自身] (108) に不満を感じ、実際に「条件というものはあまり好きではない (*Je n'aime guère les conditions*)」 (108) と答える。ベルナールの心情を聞いたユベールは「おまえの誇りを尊重し、無条件に (*sans condition*) おまえの生活を保証したい [強調は著者自身] (109) と述べるに至る。

このように、「条件 (*condition*)」は『モープラ』において、否定的なものとして用いられる傾向がある⁵⁶。「条件」によって成立する関係は対等ではあり得ないからである。決定的な約束はベルナールがエドメに学習の開始を誓うときの「最後の約束 (*dernière promesse*)」 (168) である。これは「何の制約もなく (*librement*) なされた」 (168) ものだからだ。二人の関係の〈はじまり〉に必要なものとは、上下関係を内包する条件ではなく、対等な「約束 (*promesse*)」や「誓い (*serment*)」、 「誓う (*jur*)」ことであり、その前提となるのは、互いに承認し合い、互いの言葉を信じ合うという信頼関係であった。

⁵⁵ ベルナールには、エドメの幸福のために「彼女の約束 (*sa parole*) をなかったことにしてやり、彼女の自主性 (*son indépendance*) と完全な休息を取り戻させ」という最も「確実な償いの方法」 (151) などは、思いもつかなかった。

⁵⁶ その他、狡猾な叔父のアントワーヌがベルナールとの約束に「条件 (*condition*)」 (72) をつける場面があるが、それもロッシュ＝モープラに迷い込んだエドメを騙すためのものであった。

おわりに

本稿ではエドメの変貌を中心にしてジョルジュ・サンドの小説『モープラ』を再考した。まず、私的空間では自由を享受していたエドメが、公的空間における様々な暴力によって孤立し、〈自己喪失／疎外〉状態を経て、再び自己を取り戻す過程を見た。そして、エドメと同様に男性的側面をもつサンドが、男性に同化することで「自律的」であろうとするのではなく、むしろ作中に成立しているような性別を超えた個人の対等な関係を目指していることを確認した。それにより、『モープラ』で想定される「約束」は、主体的個人による条件抜きの対等な信頼関係に基づくものであり、そこにこそ対等な人間同士の契約の〈はじまり〉の可能性が示されていることが読み取れた。以上のことから、サンドが男性のみならず、女性も自律した「個人」と捉えていることは明白である。その〈自律〉に関わっているのは、自己の「意志 (volonté)」と「自主性 (indépendance)」である。『モープラ』においてサンドが描き出したのは、「幸福な結婚」や「個人の開花」の理想に留まるものでもない。女性が公的空間において「個人」として生きることの困難を、身を以て体験していたサンドの希望は、女性が私的空間においても公的空間においても男性の従属物として疎外されず、常に自主性を維持することであった⁵⁷。理想の〈はじまり〉を描く物語としての『モープラ』は、夫に従属するものとしてではなく、女性が一人の個人として生きられる平等な社会——性別にかかわらず万人が「個人」として平等に生きられる社会——の完成をも射程に入れている。

さらに言えば、『モープラ』では、「*indépendance*」という言葉は「個人の自主性」だけに関わっているわけではない。例えば、アメリカ独立戦争に参戦中、エドメの厳しい態度を非難するベルナールに対して、アルチュールが「恥じらいを傷つけられたら、みずからの権利と本来の独立 (*indépendance*) を要求するのは当然のことだ」(185) と彼女を擁護する場面がある。アルチュール

⁵⁷ 法廷での証人喚問の際、名乗ることを求められたエドメは「*Solange-Edmonde de Mauprat*」という公の名に続けて「*Edmea sylvestris*」(296) と名乗る。「*sylvestris*」とは「森林に生育する、野生の」という意味を表すラテン語である。法廷という公的空間において、自身を「(文明や規範の制限を受けない) 野生のエドメ」と——しかも植物の学名のごとく——名乗るその姿勢は、エドメの意志や自主性、〈自律的個人〉としての振る舞いを考えるうえで象徴的なものである。

ルはさらに、アメリカ独立宣言の地「フィラデルフィア」にエドメを擬えて「名誉ある和平 (paix glorieuse) を条件にしてしか降伏しない」(185)とも述べている。この場面では、「indépendance」は明らかに〈個人の自主性／国家の独立〉という二重の意味を持つ。個人が自律的に生きるためには、社会の新しい約束が必要だと信じるサンドにとっては、社会的抑圧に抵抗し続けることはある種の革命なのである⁵⁸。

以上の分析により、ジョルジュ・サンドは、他者に支配されず、自分の立てた規律に従い、自らの意志をもって行動する人物を描き出しており、ジェンダーを越えて「個人」が〈自律的〉に生きられる社会を目指していると結論づけることができる。女性が未成年者として扱われていた時代に「個人」として公的空間で主体的に生き抜いた女性作家サンドの描く、女性を含めた〈自律的個人〉のあり方は、女性が未だにジェンダー不平等に苦しむ現代においてもなお非常に示唆に富むものである。

【参考文献】

[サンドの著作] (出版地がParisの場合は省略, 以下同)

George Sand, *Mauprat*, Garnier-Flammarion, 1969.

George Sand, *Mauprat*, Christian Pirot, Saint-Cyr-sur-Loire, 2008.

ジョルジュ・サンド『モープラ』小倉和子訳, 藤原書店, 2005年.

George Sand, *Histoire de ma vie*, Gallimard, 2004.

ジョルジュ・サンド『我が生涯の記』加藤節子訳, 水声社, 2005年 (3分冊).

George Sand, *Correspondance*, Tome 1-25, édition de George Lubin, Classiques Garnier, 2013.

ジョルジュ・サンド『ジョルジュ・サンドからの手紙』持田明子編, 藤原書店, 1996年.

ジョルジュ・サンド『書簡集 1812-1876』持田明子・大野一道編, 藤原書店, 2013年.

George Sand, « Quelques réflexions sur Jean-Jacques Rousseau », in *Revue des Deux Mondes* [1^{er} juin 1841], *George Sand Critique 1833-1876* [Textes de George Sand sur la littérature “présentés, édités et annotés”], Du Lérot, éditeur Tusson Charente, 2006.

⁵⁸ ルソーが『社会契約論』において契約の根幹に据えたのは「各構成員をそのすべての権利とともに、共同体の全体にたいして、全面的に譲渡 (l'aliénation totale) すること」(Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat social*, p.360. [ジャン=ジャック・ルソー『社会契約論』, pp.29-30.])であった。自己の「全面的な譲渡 (l'aliénation totale)」がルソーの理想の社会のために不可避であるのと同様に、エドメの「疎外 (aliénation)」という試練は、女性を含めた各人が連帯する一人となるためのイニシエーションとして捉え得る。

[研究書・研究論文など]

- Bozon-Scalzitti, Yvette, « *Mauprat*, ou la belle et la bête », *Nineteenth-century French Studies*, vol. X, n^{os} 1 et 2, 1981-1982.
- Chastagnaret, Yves, « *Mauprat*, ou du bon usage de *l'Émile* », *Présence de George Sand*, n^o 8, mai 1980 [« George Sand et Rousseau »].
- Gilot, Michel, « La présence du XVIII^e siècle dans *Mauprat* », *Présence de George Sand*, n^o 23, juin 1985 [« George Sand et le XVIII^e siècle »].
- Grand Dictionnaire Universel du 19^e siècle*, (réimpression de l'édition de Paris, 1866-1869).
- Harkness, Nigel, « Une masculinité trop visible et les enjeux de la fraternité *queer* dans *Mauprat* de George Sand (1837) », *Masculinités en révolution de Rousseau à Balzac*, l'Université de Saint-Étienne, 2013.
- Hecquet, Michel, *Lecture de Mauprat, de George Sand*, Presses Universitaires de Lille, 1990.
- Lacassagne, Jean-Pierre, préface à l'édition Folio de *Mauprat*, 1981.
- Laforgue, Pierre, « Identité et fiction dans *Mauprat* », *Corambé—Identité et fiction de soi chez George Sand*, Klincksieck, 2003.
- Mozet, Nicole, préface « La parole humaine » à l'édition Christian Pirot de *Mauprat*, 2008.
- Mülhemann, Suzanne, « *Mauprat*, ou la création de l'homme », *Présence de George Sand*, n^o 8, mai 1980 [« George Sand et Rousseau »].
- Naginski, Hoog Isabelle, « George Sand : l'éducation d'une enfant du siècle », *L'éducation des filles au temps de George Sand*, Artois Presses Université, 1998.
- Planté, Christine, « George Sand, *fil*s de Jean-Jacques », *George Sand : Intertextualité et Polyphonie I*, (*French Studies of the Eighteenth and Nineteenth Centuries*), Peter Lang, 2010.
- Rousseau (Jean-Jacques), *Du Contrat social, Œuvre complètes*, t. III, Pléiade (Gallimard), 1964.
- ルソー (ジャン=ジャック) 『社会契約論』 桑原武夫・前川貞次郎訳, 岩波文庫, 1954年.
- Rousseau (Jean-Jacques), *Emile ou de l'éducation*, Garnier-Flammarion, Paris, 2009.
- ルソー (ジャン=ジャック) 『エミール』 (全三冊) 今野一雄訳, 岩波文庫, 1962-64年.
- Sicard, Claude, « La genèse de *Mauprat*. Remarques sur le manuscrit du roman », *Revue d'Histoire Littérature de la France*, n^o 5, septembre-octobre 1968.
- アレント (ハンナ) 『人間の条件』 志水速雄訳, 筑摩書房, 1994年.
- 池田孝江 『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』 平凡社, 1988年.
- 石橋美恵子 「*Mauprat*におけるフェミニズム——その成立前後の事情をめぐって——」 『フランス文学論集』 (日本フランス語フランス文学会) 第4号, 1968年.
- 小倉和子 「変身譚に読み取る平等への希求——『モープラ』をめぐって」, 日本ジョルジュ・サンド学会 『200年目のジョルジュ・サンド』 所収, 新評論, 2012年.
- ジョルジュ・サンド研究会 『ジョルジュ・サンドの世界』 第三書房, 2003年.

- スタロバンスキー（ジャン）『ルソー 透明と障害』山路昭訳、みすず書房、1973年。
- ドゥコー（アラン）『フランス女性の歴史3 革命下の女たち』渡辺高明訳、大修館書店、1980年。
- 富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会、2011年。
- 高岡尚子「政治的言説とジェンダー：1848年のジョルジュ・サンドをめぐる」『欧米言語文化研究』（奈良女子大学文学部欧米言語文化学会）第5号、2017年。
- 長塚隆二『ジョルジュ・サンド評伝』読売新聞社、1977年。
- 新實五穂「書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活——男装と女性性の関係——」『日本家政学会史』第54号、2003年。
- 西尾治子「ジョルジュ・サンドの女性思想——その両義性と現代性」『フランス語フランス文学』（慶応義塾大学日吉紀要）第55号、2012年。
- 日本ジョルジュ・サンド学会『200年目のジョルジュ・サンド』新評論、2012年。
- ブシャルドー（ユゲット）『ジョルジュ・サンド』北代美和子訳、河出書房新社、1991年。
- ボンシルヴァン＝フォンタナ（マリー＝ルイーズ）『ジョルジュ・サンド』持田明子訳、リプロポート、1981年。
- 水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房、1979年。
- 村田京子『女がペンを執る時——19世紀フランス・女性職業作家の誕生』新評論、2011年。
- 持田明子『ジョルジュ・サンド 1804-76』藤原書店、2004年。
- 持田明子「*Mauprat*に見る〈絶対の愛〉と〈自己形成〉」『九州産業大学教養部紀要』第27巻2号、1990年。
- 吉岡知哉『ジャン＝ジャック・ルソー論』東京大学出版会、1988年。
- ルソー（ジャン＝ジャック）『新エロイズ』（全四冊）安土正夫訳、岩波文庫、1960-61年。
- ルソー（ジャン＝ジャック）『人間不平等起源論』本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1972年。
- ルソー（ジャン＝ジャック）『ルソー 自然と社会』平岡昇編訳、白水社、1967年。